加藤屋敷遺跡の墨書土器について

山形大学人文学部　三上喜孝

一　釈文

判読できた文字のうち、主要なものについて考察する。

（1）「物」

四点出土した。いずれも須恵器の底部外面に墨書されている。字形は四点とも同一である可能性がある。

（2）「主」

三点出土した。いずれも須恵器の底部外面に墨書されている。三点とも、横に広がる扁平な字形が特徴的である。

（3）「子鷹」

二点出土した。いずれも須恵器の体部外面に横位で墨書されている。同一人の筆による可能性がある。

（4）「大」

三点出土した。いずれも須恵器の底部外面に墨書されている。

（5）「中清」

一点出土した。須恵器の体部外面の二カ所に墨書されている。一方は倒位で、一方は横位である。

（6）「他田」

一点出土した。須恵器の蓋のつまみ部分に墨書されている。

（7）「王仁」

一点出土した。黒色土器の底部外面に墨書されている。

（8）その他

「若」「山」「井」「継」「㊐」などがある。

二　記載様式の特徴

次に、本遺跡出土の墨書土器の記載様式上の特徴について考察したい。

本遺跡出土の墨書土器で顕著な特徴は、同一文字の筆跡が同一であると考えられること、そして、同一の文字が同一の部位に記される傾向が強いことである。すなわち、同一の文字は同一人物により、同一の部位に記された可能性が高い。

多くは底部外面に書かれているが、体部外面に書かれているものもある。「子鷹」や「中清」がそれにあたるが、両者は、あるいは個人名をあらわしているのかも知れない。もしそうだとすれば、個人名を記す場合に体部に記すことが意識されていたと考えることもでき、墨書の内容と、部位には、一定の関連があるものととらえることができるであろう。

また、興味深いのは、「王仁」銘墨書土器である。これは、書き出しの「王」の文字が、底部外面の際（きわ）のところから書き始められている点が特徴的だが、この特徴は、同じ南陽市の庚壇遺跡の刻書土器の「王仁」と類似している特徴である（『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第一六一集　庚壇遺跡発掘調査報告書』財団法人山形県埋蔵文化財センター、二〇〇七年）。出土遺跡が異なり、墨書と刻書という違いがあるにもかかわらず、同一の文字が類似した書かれ方をしている点は、注目すべきであろう。

三　文字内容に関する考察

次に、墨書土器の文字内容について考察したい。

八世紀から九世紀を中心に全国各地から出土する墨書土器に記されている文字は、実に多様である。地名や人名、内容物を記したものや、吉祥的な文字を記したものなどさまざまであるが、書かれている文字にどのような意味があるのか、あるいは、なぜその文字を記したのか、など、明らかでないものも多い。

本遺跡出土の墨書土器でまず明確にその意味がわかる文字内容としては、「他田」（須恵器蓋）がある。これは、「他田舎人」あるいは「他田部」というウジ名の一部を記したものであると考えられる。

他田舎人、他田部は、敏達天皇の訳語田幸玉宮の名にちなんだウジ名である。いずれも東国を中心に分布している。他田舎人は、信濃国の筑摩郡や小県郡で郡司層のウジ名として知られ、埴科郡家と推定される千曲市の屋代遺跡群出土の七世紀代の木簡にも、「他田舎人」のウジ名がみえる（『長野県屋代遺跡群出土木簡』（財）長野県埋蔵文化財センター、一九九六年）。他田部は、天平勝宝四年（七五二）十月の正倉院宝物黄絁に上野国新田郡の擬少領として「他田部君足」がみえるほか、秋田城跡出土木簡に「他田部粮万呂」（第一六号）がみえており（秋田城跡調査事務所『秋田城出土文字資料集Ⅱ』、一九九二年）、出羽国における分布が確認される。

このように、ウジ名の一部が墨書されている例がみられることからすると、「物」という墨書も、物部というウジ名の一字を記したものと推定される。「物部」も、出羽地域での分布が確認できるウジ名である。

興味深いのは「王仁」の墨書である。同じ字種が、南陽市の庚壇遺跡からも出土している（刻書土器）ことからすると、「王仁」は個人名というよりも、特定の集団をあらわしたものとみることができるであろう。周知のように『古事記』応神天皇条には、百済から『論語』や『千字文』を伝えた伝説上の人物として「王仁」の名がみえる。本遺跡にみえる「王仁」は、あるいはその後裔を称する渡来系氏族の集団であろうか。

四　まとめ

最後に、本遺跡出土の墨書土器の特徴を簡単にまとめておきたい。

（1）同一文字の筆跡や部位が同じである点が顕著な特徴である。

（2）集団名を記したと思われる墨書（他田、物、王仁など）から、当該地域における氏族集団の分布を知ることができる。

こうした特徴は、地域社会において「土器に墨書する行為」や「土器に墨書することの意味」を考える上で、有益な示唆を与えてくれるだろう。今後、類例を積み重ねることにより、こうした特徴の意味するところをさらに検討していく必要がある。